

アヴァダーナ文献に見られる經典読誦

平 林 二 郎

1. 有部と *Divyāvadāna*

説一切有部は、北西インドで勢力を誇った部派であり、マトゥラーに現存する銘文などから紀元前 1 世紀頃には既に存在していたことが知られている¹⁾。有部系²⁾の仏教教団が伝持した律としては「根本説一切有部律」(以下 MSV)があり、この MSV のなかには多くの仏教説話が説かれている。

MSV に説かれている仏教説話の中の一群は *Divyāvadāna* (以下 Divy) に説かれる多くの説話と共通している³⁾。それゆえ、Divy に説かれる多くの説話(のプロット)は部派仏教時代、もしくは、それ以前に成立していたと考えられる⁴⁾。

そこで本稿では、Divy に見られる經典読誦に関する記述を検討することで、部派仏教時代の有部における經典読誦の意義を明らかにしていきたい。

2. *Divyāvadāna* に見られる經典読誦

Divy において、經典が読誦されている箇所を見ると、「読誦(する)」という原語としては、*svādhyāya-* (denominative)⁵⁾、 $\sqrt{\text{path}}$ などが使用されている⁶⁾。本稿ではこれらの動詞とその派生語が使用されている用例を中心に検討をおこなう。

2.1. *svādhyāya*-に関する用例

まず Divy において、*svādhyāya*-という動詞とその派生語が使用されている第 1, 2, 18 章の用例を検討していきたい⁷⁾。

2.1.1. 第 1 章 *Koṭīkarṇāvadāna* に見られる用例

Divy 20.22–25. *athāyusmān Śroṇo bhagavatā kṛtāvakāśah* ⁽⁸⁾ *asmāt parāntikayā* ⁽⁸⁾ *guptikayā Udānāt Pārāyaṇāt Satyadīṣṭah Śailagāthā Munigāthā Arthavargīyāni ca sūtrāṇi vistareṇa svareṇa svādhyāyam karoti* / (下線筆者)

そこで世尊から機会を戴いた具寿者シュローナはアパランタカ調(アシュマ国の西方の

方言)⁹⁾でウダーナから、パーラーヤナから、サティヤドゥリシュタ、シャイラガーター、ムニガーター、アルタヴァルギーヤの諸経を大きな声で読誦した。

上記は、釈尊が具寿者シュローナ・コーティカルナに6つの初期仏教經典¹⁰⁾を唱えさせている場面である¹¹⁾。これら諸経の読誦後、釈尊は甘美に諸経を読誦したコーティカルナを褒めている。したがって、この諸経の読誦は仏教の基礎的な修行が順調に進んでいることを意味している。

2.1.2. 第2章 *Pūrṇāvadāna* に見られる用例

Divy 34.28–35.2. sa taiḥ sārḍhaṃ mahāsamudraṃ saṃprasthitāḥ / te rātryāḥ pratyūṣasamaye Udānāt Pārāyaṇāt Satyadrīṣaḥ Sthaviragāthāḥ Śailagāthā Munigāthā Arthavargīyāni ca sūtrāṇi vistareṇa svareṇa svādhyāyaṃ kurvanti / (下線筆者)

彼（プールナ）は彼ら（商人達）とともに大海に出発した。彼ら（商人達）は、夜が明ける頃に、ウダーナから、パーラーヤナから、サティヤドゥリシュタ、シャイラガーター、ムニガーター、アルタヴァルギーヤの諸経を大きな声で読誦した。

上記は、隊商主プールナがシュラーヴァスティーの商人達とともに航海に出ている場面である。ここで商人達は夜が明ける頃に6つの初期仏教經典を読誦し、また、プールナにこの教えを説いたブッダ（＝釈尊）が如何なる人物であるかや、今どこにいらっしゃるかなどを説明している。この商人達による初期仏教經典の読誦は釈尊の教えを理解するための読誦、ならびに、信仰の表白としての読誦を意味していると考えられる。また、Sylvain Lévi は、この用例から初期仏教經典の一部が、出家者のみならず、在家者にも日常的に読誦されていたことを指摘している¹²⁾。

この他、*Pūrṇāvadāna* においては以下のような用例も見られる。

Divy 55.7–9. yat tatra paṭhitāṃ svādhyāyitaṃ skandhakaūśalaṃ ca kṛtaṃ, tena mama śāsane pravrajya sarvakleśaprahāṇād arhattvaṃ sākṣātkṛtaṃ iti (下線筆者)

そこで、〔經典を〕朗唱し、読誦し、〔五〕蘊に巧みとなり、彼（プールナ）は私の教えにおいて出家し、一切の煩惱を断じた後に阿羅漢性を証得した。

上記から、經典を読誦し、釈尊の教えを理解することが阿羅漢性の証得と関係しているとわかる。

2.1.3. 第18章 *Darmarucyavadāna* に見られる用例

Divy の第18章¹³⁾には、大魚ティミンギラに飲み込まれそうになった商人達が

「仏に帰命いたします」と言いその難を逃れ、その後出家し、阿羅漢性を証得したという説話が説かれている。以下は、商人達が阿羅漢性を証得したことに疑問を持った比丘達の質問に、釈尊が答えている場面である。

Divy 233.24–29. maraṇakālasamaye praṇidhānam kṛtavanto yad asmābhiḥ Kāśyapaṃ samyaksambuddham āsādyoddiṣṭam adhiṭam svādhyāyitaṃ ca na kaścit guṇagano 'dhigato 'sti, asya karmaṇo vipākena vayaṃ yo 'sau anāgate 'dhvani Kāśyapena samyaksambuddhena Śākyamunir nāma samyaksambuddho vyākṛtas taṃ vayaṃ ārāgayemo na virāgayemaḥ¹⁴⁾ / (下線筆者)

彼らは死ぬときに誓願を立てた。「我々は正等覚者カーシャパに近侍し、〔彼の教えを〕口唱し、唱誦し、読誦したが、いかなる徳の集まりも得られなかった。〔しかし、〕この業の異熟によって、我々は、未来世において、正等覚者カーシャパによって授記されたシャーキャムニという名前の正等覚者を悦ばせよう、不快にさせないようにしよう」と。

上記を見ると商人達は、過去世において、(釈迦仏の前の仏である)迦葉仏の教えを読誦しても徳の集まりを得られなかったが、この業の異熟によって、釈迦仏を悦ばせ、不快にさせないようにしたいとの誓願を立てていた。その結果、かつて迦葉仏の弟子であった商人達は釈尊の下で出家し、阿羅漢性を証得している。

2.2. √paṭh-に関する用例

√paṭh-については paṭhitaṃ svādhyāyitaṃ など¹⁵⁾、svādhyāya-と同箇所で使用される用例が多数見られる。ここでは√paṭh-のみが使用されている第36章の用例を紹介したい。

2.2.1. 第36章 *Mākaṇḍikāvadāna* に見られる用例

Divy 532.9–11. Mākaṇḍika, na kiṃcit karaṇīyam asti api tv etā dārikā rātrau pradīpena buddhavaśanam paṭhanti, atra bhūrjēna prayojanaṃ tailena masinā kalamayā tūlena /

(下線筆者)

(シャーマーヴァティー王妃は答えた)「マーカンディカよ、何も用事はありません、しかしながら、夜に侍女達が明かりを灯してブッダのことは朗唱しています。ここに、樺皮、油、墨、筆、綿が必要です」

上記は遊行者から大臣になったマーカンディカが、ウダヤナ王の王妃であるシャーマーヴァティーのもとに行き、用事を尋ねている部分である。

この部分を見ると、王妃に仕える侍女達によって、ブッダのことが朗唱されており、また、それが書写されていたと示唆されている。したがって上記は、侍女達つまり在家の女性達が日常的にブッダのことは朗誦し、また、それを書写していたことを示す根拠となる。

3. 小結

本稿では、Divy において svādhya-, √paṭh-が使用されている用例を挙げ、その内容を検討した。本稿の小結として以下の2点を述べたい。

①本稿 2.1.1., ならびに, 2.1.2. の用例に見られるように, Divy において經典読誦は釈尊の教えを理解するための基礎的な修行や信仰の表白を意味していた¹⁶⁾。また, 本稿で扱った用例を含め, 筆者が Divy における經典読誦を検討した限り, Divy には大乘仏教に見られるような經典を読誦する行為自体に意味を持たせている部分¹⁷⁾ は見当たらなかった。しかしながら, 本稿 2.1.3. の *Dharmarucyavadāna* においては, 迦葉仏の教えを読誦しても徳の集まりを得られなかったが, この業の異熟によって, 釈迦仏を悦ばせ, 不快にさせることがないようにするという内容が見られた。

②初期仏教經典の一部が出家者のみならず, 在家の男性によって読誦されていたことは既に Lévi によって指摘されている。本稿 2.2.1. において *Māṇḍikāvadāna* の用例を検討した結果, 王妃の侍女達つまり在家の女性達が日常的にブッダのこゝばを読誦し, また, それを書写していたと明らかになった。

Divy の編纂時期は, 平岡によって十世紀前後に落ち着くと指摘されている¹⁸⁾。しかしながら, Divy に含まれている各説話の成立年代については研究が進んでいるとはいえない¹⁹⁾。部派仏教時代に經典を読誦する意味がどのように変遷したかを解明するためには, 今後, 各説話の成立年代を特定していく必要がある。

1) 三友 (1996: 9)。

2) 根本説一切有部と説一切有部については榎本 (1998), 八尾 (2007) を見よ。

3) Divy には 37 の説話が含まれているが, それらの中の 21 の説話が MSV と共通している。平岡 (2002: 116)。

4) 平岡 (2002: 116–135) は, Divy の編纂者が MSV からいくつかの説話を抜き出したことを論証している。

5) Cf. BHSD p. 616.

6) 「読誦 (する)」の原語としては, √ vac-, √ adhī- など使用されている。

7) この他, Divy 第 23 章 (339.20–22), 第 31 章 (464.18–27), 第 34 章 (631.20–22), Mukhopadhyaya (1954: 99.8–9), 第 35 章 (489.13–492.11) などにも svādhya- に関する用例がある。

8) asmāt parāntikayā については問題があり, BHSD (p. 44) は aparāntaka である可能性を想定している。石上 (1967: 81 註 13) を見よ。

9) 平岡 (2007a: 31 註 (2)) を見よ。

10) *Koṭṭharāvadāna* で読誦されるこれらの經典リストは *Khuddakanikāya* に含まれる經典に

- 相当する。これらの經典リストを扱った近年の研究成果としては馬場（2017: (132) – (133)）がある。
- 11) この用例については MSV の *Carmavastu*（「皮革事」）にパラレルがある。ギルギットで発見された *Carmavastu*（Clarke（2014: 41 86v9–10））を見ると6つの經典の他に *Sthaviragāthā* と *Sthavirīgāthā* が加えられている。
 - 12) Lévi（1915）を見よ。
 - 13) 第18章には本稿で扱う用例の他に、Divy 236.18–21, 246.23–39 に *svādhyāya*-に関連する用例が見られる。
 - 14) *ārāgayemaḥ*, ならびに, *na virāgayemaḥ* は Opt. 1st. pl. P. で使用されている。このような用例は BHSG に見られない。
 - 15) 本稿 2.1.2. の2つ目の用例を見よ。
 - 16) 石上（1967: 50）を見よ。また、初期仏教經典の読誦（諷誦）が仏教を信仰する表白を意味している箇所としては『増一阿含經』（T vol. 2 550c23–29）などがある。
 - 17) 石上（1967: 46–48）を見よ。
 - 18) 平岡（2002: 139）を見よ。
 - 19) 平岡（2002: 116–151）を見よ。

〈略号〉

- BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*. Franklin Edgerton. New Heaven: Yale University Press, 1953.
- BHSG *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*. Franklin Edgerton. New Heaven: Yale University Press, 1953.
- Divy *Divyāvadāna*. Ed. Edward Byles Cowell and Robert Alexander Neil. *The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends*. Cambridge: The University Press, 1886.
- MSV *Mūlasarvāstivāda-Vinaya*.

〈参考文献〉

- Clarke, Shayne. 2014. *Vinaya Texts*. Gilgit Manuscripts in The National Archives of India, Facsimile Edition, Volume I. New Delhi: National Archives of India; Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University.
- Lévi, Sylvain. 1915. “Sur la récitation primitive des textes bouddhiques.” *Journal Asiatique* 5 (série 11) : 401–447.
- Mukhopadhyaya, Sujitkumar. 1954. *The Śārdūlakarṇāvadāna*, Santiniketan: Viśvabharati.
- 石上善應 1956「仏教初期の読誦經典について」『宗教文化』11: 48–58.
- 1967「初期仏教における読誦の意味と読誦經典について」『三康文化研究所年報』2: 45–90.
- 榎本文雄 1998「根本説一切有部」と「説一切有部」『印仏研』47 (1) : (111)–(119).
- 馬場紀寿 2017「小部の成立を再考する——説一切有部との比較研究——」『東洋文化研究所紀要』171: (129)–(173).
- 平岡聡 2002『説話の考古学』大蔵出版.
- 2007a『ブッダが謎解く三世の物語『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳（上）』大蔵出版.
- 2007b『ブッダが謎解く三世の物語『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳（下）』大蔵出版.
- 三友健谷 1996「説一切有部の成立」『印仏研』45 (1) : 1–11.

八尾史 2007 「『根本説一切有部』という名称について」『印仏研』55（2）：（132）-（135）.

—— 2013 『根本説一切有部律彙事』連合出版.

（平成30年度科学研究費基盤研究（C）16K02172による研究成果の一部）

〈キーワード〉 *Divyāvadāna*, 經典読誦, 部派仏教, 有部, 根本説一切有部律

（大正大学綜合佛教研究所研究員）

—— 新刊紹介 ——

日野慧運 著

金光明經の研究
説法師と經典編纂についてのケーススタディー
（インド学仏教学叢書23）

B5版・344頁・本体価格8,000円
山喜房佛書林・2018年1月